

みんなで育てる「たいしの子」vol.2

幼小中一貫教育だより

非認知能力を伸ばす「町立中学校」の取り組み

仲間意識を高め、集団としての力を伸ばす

太子中の伝統！「業間運動」



業間運動は長年続く町立中学校の伝統の1つです。2時間目と3時間目の20分の休み時間に、全校生徒が運動場に集合し、様々な取り組みを行うことをとおして非認知能力を伸ばしています。ラジオ体操、ドッジボール、長縄とびなどに日々取り組むことで基礎体力向上にも効果があります。

コロナ禍の影響で中断していましたが、令和4年11月より再開し、12月に行われる長縄（みんなでジャンプ）大会にむけて、学校全体で取り組みました。長縄大会では一番多く跳べたクラスが優勝となりますが、回数を競うだけでなく、クラスごとに声を掛け合い、様々な経験をとおして仲間を知り、受け入れ、協働していくにはど

うしたらいいのか考えます。「縄を回す2人の息が合うこと」、「外側の人は、他より高く跳ばなければならないこと」、「掛け声をして、跳ぶタイミングを合わせること」など知恵を出し合い、クラスで協力します。本番に向けて、昼休みや終礼の時間を利用して、クラスそれぞれのやり方で練習を重ねます。

12月20日(火)に行われた長縄大会では、10分間の練習の後、事前にくじで決めた順番で1クラスずつ跳びます。長縄大会の大半の時間は「仲間」を見守る時間です。どのクラスも「練習よりも多くの回数を跳びたい」という思いがあり緊張感があります。だからこそ、「見守る姿」はとても重要となります。

見守られている「安心感」「信頼感」は、つながる力を育みます。跳び終えたクラスに全員で拍手を送る姿は、とても良い温かな光景でした。コロナ禍で、全校で一緒に何かをするという機会がいくつも失われる中で、とても良い一日となりました。

教えて!とくどめ先生!

「非認知能力の3つのグループ」

ここまで、非認知能力についてなぜ注目されるようになったのかについて見てきましたが、何度も言うように決して新しいものでも何でもなく、私たちが今まで「〇〇な心」や「〇〇力」などの言い方で呼んでいたようなものが、まさに非認知能力に該当するということなのです。

非認知能力は自分の内面や個人の特性に関わりの深い力としての総称であると捉えることができます。もう少し厳密に言えば、「私の非認知能力が高くなった」や「私は非認知能力が低いから・・・」という言い方は適切ではありません。なぜならその非認知能力とは一体何の力を指しているのかがあまりにもぼんやりしているからです。それほど非認知能力というものは、客観的な数値で測ることが難しい力の総称であるということなのです。そこで、岡山大学の中山芳一准教授は、教育現場の先生方と一緒に非認知能力を整理したのが、右上の図になります。

「①自分と向き合う力」「②自分を高める力」「③他者とつながる力」の3つのグループに分けています。「自分と向き合う力」は、今の自分を維持・調整するために、我慢したり気持ちを落ち着かせたりするための力です。

「自分を高める力」は、今の自分をさらに変えていくた

非認知能力 3つのグループ



めに、やる気になったり自信を持ったりする力です。「他者とつながる力」は、他者と共に何かするために必要な、コミュニケーション力や共感性、協調性などを指しています。大きく3つのグループに分けましたが、さらに言えば非認知能力とは、「自分」と「他者」の2軸で捉えることも可能です。つまり、対自的なのか、対他的なのかということです。このように3つのグループに分けたうえで、それぞれの特徴を見ていきましょう。

教えて!とくどめ先生のコーナー 次回「非認知能力のプラス面とマイナス面」お楽しみに!

◆問合せ 教育総務課 ☎98-5533